在日同胞青年の中で民族圏を構築、拡大強化するための運動方法論
～アイデンティティの視点から

朴憲浩
李鎔一

１．　はじめに－問題意識と研究の目的

総連第２１回全体大会報告で、「同胞再発掘運動」が提起され、民団、未組織、帰化した同胞にいたるまで網羅していくということが主課題となった。この点、在日本朝鮮留学生同盟（以下留学同）は、以前から日本学校出身者に対して様々な形でアプローチを試みており、その活動は非常に特徴的なものである。そこで、留学同の活動と、実際に留学同に加盟している在日朝鮮人青年のアイデンティティを分析することによって、その活動の可能性と限界を明らかにし、それをもとに民族圏拡大のための提言を行う。

その方法として、留学同に所属している、異なる背景をもつ同胞学生２人にインタビューをとる。そして留学同での活動、運動が彼らのアイデンティティにどのような影響を与えたかを聞き取り運動の有効な点、問題点を読み取る。

在日朝鮮人運動団体が、運動において当然必要な要素となる、組織の拡大と結束力の強化のための活動を行うとき、その組織の考える民族的アイデンティティを共有する集団が在日朝鮮人社会であるという論理が存在している。つまり、そのようにして決定された「民族的アイデンティティ」のあり方をクリアしたものだけが民族団体の構成員として承認されている。逆に言えばその「民族的アイデンティティ」にそぐわないものは、その運動において周縁化されてしまうのであり、それが在日同胞青年の中で民族圏を構築、拡大強化することへの障害になっているのではないかと考える。よって留学同の活動、運動がアイデンティティに与える影響を読み取るという方法をとった。

２．アイデンティティ・ポリティクスに関する先行研究と本論の姿勢

このように、在日朝鮮人運動には、運動する組織が特定のアイデンティティを基盤にして政治的要求をするという、アイデンティティ・ポリティクスが存在している。

在日朝鮮人は＜朝鮮人＞であるがゆえに日本社会から＜差別＞＜抑圧＞を受けてきた。それに対して、「民族の誇り」をもって同化・抑圧の圧力に抵抗していくことの必要性が説かれ、それによってのみ在日朝鮮人は解放されるのだと考えられてきた。すなわち＜民族＞が抑圧からの解放、自由への象徴であった。この思想のもとに、一枚岩的な在日朝鮮人アイデンティティが形成されていくことになる。この抵抗の手段としての在日朝鮮人アイデンティティの形成に、在日朝鮮人教育は大きな役割を果たしてきた。在日朝鮮人教育は、民族の言語、歴史などの教育を通して、「民族の自覚と誇り」を育てること、そ

してその「誇り」をもって、日本社会からの「同化」の圧力に対抗していくことを目標とする営みであった。(金泰泳　1999)

在日朝鮮人運動は、「朝鮮人」であるからという理由で抑圧してくる圧力にたいして、その抵抗の手段として、「民族」の名のもとに団結することによって運動を実践してきたのである。しかし、従来の在日朝鮮人運動は、在日朝鮮人が固有の民族的アイデンティティを有していることをアプリオリに前提とする傾向が強い。

それに対し、平等を構築する際の基盤となる概念（例えば健常者―障がい者）は、差別のなかで創造されたものに他ならず、アイデンティティが奪われる、あるいは否定される一方で、アイデンティティを持たなければならないとう社会的圧力もまた、より一層強まっていることが見落とされていると指摘し、目指すのは「民族」の解放ではなく「個」の解放であるべきとする論もある。(鄭暎恵)

また、金泰泳は、「個」の解放の必要性を認めながらも、それが「民族的アイデンティティの確立」という手段によって社会の抑圧状況に対抗していこうとする者たちを、逆に抑圧してしまうというアイデンティティのジレンマを指摘し、「柔軟で弾力性のある、『選択』によるアイデンティティ、『しなやかなアイデンティティ』」に可能性を見出している。

彼は、朝鮮人集住地区の地域活動である「こども会」に、幼少のころから熱心に参加していた在日 3 世の順子さんを例にとった。

本名を使って生活している順子さんは、子供会事業にとって象徴的な存在であり、在日朝鮮人教育実践にとって、ある種のモデルケースであった。中学生になって順子さんは、毎年、年度初めに、クラスの自己紹介の時間、在日朝鮮人としての自らの「思い」を、日本人生徒の前で語ることを「役割」として教師から求められた。日本人生徒が在日朝鮮人である順子さんの立場や思いを理解することが、順子さんの民族的アイデンティティを保障することである、それが順子さんのためなのである、という教師の信念のもとにそれは行われてきた。しかし、順子さんにとって「思いを語る」ということは、自分をさらけ出すことであり、“身を削る”ことでもあった。・・・「順子さんのため」という言説はいつしか「順子さんの義務」に転化していたのである。(金泰泳　1999)

周囲に求められる「在日朝鮮人像」にならなくてはという思いと、「ありのままの自分」から遊離してしまうのではという恐れ。その間でのジレンマに苦しむ彼女は、高校に入学し、それまで使ってきた朝鮮名を日本名に戻した。そこには「在日朝鮮人としての責任」という荷物を降ろそうという考えはなく、「自分なりの在日朝鮮人」像を見つけて生きたいという考えのなかでの「選択」があった。

このような、厳しい社会状況のなかで生きるための戦略的な選択を、「柔軟で弾力性のある、『選択』によるアイデンティティ、『しなやかなアイデンティティ』」として、評価しようとした。

以上、概観したところ、確かに、在日朝鮮人運動が前提としている民族観が、実は日本の単一民族観と変わらない本質主義的なものであり、「個」の尊重が必要であるという指摘は正しいといえるだろう。しかしスチュアート・ホールが指摘したように、被抑圧民族が民族に対して行われている抑圧に対抗するときに、そこで用いられた「戦略的なアイデンティティ」が果たした役割は過小評価できない。民族として受けてきた抑圧・差別に対しては民族として向き合わねば、実践的解決にはつながらない。

在日朝鮮人運動の目指すものを考えたときに、民族的差別への抵抗というのは間違いなく含まれる。そのための民族的アイデンティティは、実践的場面において必要なものである。しかし同時に、世代交代等の社会状況の変化に伴い、日本籍者や「ダブル」等のそれまで周縁化されてきた存在も看過はできないものとなっている。民族圏の構築、拡大強化という目標を掲げるとするならば、多様化するアイデンティティの現状を的確に分析し、個々に対して柔軟に対応していくことが必要であり、そして同時に、運動団体としての機能を生かすためには、運動において必要とされる民族的アイデンティティを同胞青年が自発的に身につけていくことができるという、比較的自由な土壌というものが必要ではないかと考える。

３．インタビュー分析

インタビューの対象は現在留学同に所属しており、中学は韓国学園に通い、その他の期間は日本の学校で育った金（山井）裕樹＜仮名＞、そして同じく留学同に所属し、父親が日本人、母親が朝鮮人のいわゆる「ダブル」で日本の学校のみに通いながら、在日朝鮮人の集まりにも参加していた洪泰俊＜仮名＞である。

上に述べたような視点から二人のインタビューを分析した。

３－１．「総連系民族学校に通わなかった者」をめぐって－金（山井）裕樹＜仮名＞の場合

金は中学１、２学年時に韓国中学に通い、それ以外の期間は日本学校に通っていた。韓国中学在学中、日本学校への転校後も自らが「在日朝鮮人」であることについて深く考察したことはなかったという。金は大学二回生になり、自らＫＯＲＥＡ文化研究会（コリ文研）を訪ねる。

「俺な、大学入る前に名前をな、キム・ユスでいっていいかってきいてん。なんでかっていったら、大学入ったら、将来結婚する相手もいるかも知れへん。大学生活ってバラのような感じやってん。そんな時にさ、ゆうたら山井祐樹って言うのは自分を隠してるわけやん。韓国人やのに。だから、話はしててん。日本のどっかの家庭やったら、毛嫌いする、そういうのを阻害するような環境があるっていうのは

知ってたから、そういうとこにいったときに自分ていうのが、ゆうたら、隠してんのが嫌やってん。だから、初めからわかるやんそしたら、ユスやっていうので。だから本名でいっていいかって聞いてん。ほんで親は、もうええやろそんなんって。山井祐樹やんって。んでそんなんきいて、あ、そっかぁって。アボジオモニも両方ともそんなん。でお姉ちゃんが高校のときにな、お姉ちゃんは中学が韓国学園で、高校が日本の私立の女子校いって、2 年に本名に変えてん。いじめられてんな。変えてから。無視されたりとか。それで一度家が若干傾いてん。だからお前はそんなん、山井祐樹でいけって。だから、俺が大学で名前変えよかって言った時にそんなんなったんは、たぶん、そんなんやったとおもう。まあ、だから大学入って名前は変えんかったし、変えよか思とったけどそんなん入って 1,2 週間で消えとったし。どうでもよくなった。」

「自分から本名にしよって思ったときはあったけど、深く考えてへんかったわけやん。あくまで自分をさらしたいみたいな。歴史を踏まえたうえで本来お前は朝鮮人やねんから名前を変えろって言われても、なんかピンとこえへん。」

朝鮮名に変えようとした動機は、自らが「在日朝鮮人」であるということの歴史性に鑑みたものではなく、自分の素性をはじめから隠すことなく、他人に表明していきたいというものであった。名前だけでなく「在日朝鮮人」であること自体、他人とは違うのかというくらいの認識であった。

この後、留学同と出会い、活動していくことを通して、名前を始めとする「朝鮮人であること」についての意識が変わっていく。

「自分から行ってんやんか。なんで行ったかっていったら、二回になって、流石に俺このままやったら大学生活死ぬなと思って、何かしらサークル入ろうと思って。で、そのときに 3 つくらい用意して。天文同好会とか。そんときの一つの候補が、朝文研、韓文研、コリ文研とかまあ、そういう民族的な場のサークル。そういうのんがあるっていうのは知っとってん。ふんで訪ねて、見つけてん。」

「ほんで行ったら、さっきの話。三人（既存のメンバー）がいて話してんな。ほんでいったらなんかパッチギの、ビラとか置いてたりして。そういう風な話で盛り上がるわけやん。そして名前見て、あんた在日？って。そうですって言ったら、めっちゃうれしそうにしてはって。・・・で、あ、本名これ「ユス」って読むんやろっていわれて。俺びっくりしてん。何でわかるんですかってなるやん。まあ朝高生やから、読めたんやろうけど。すごいびっくりして。俺それまで朝鮮学校てさ、そこまで具体的じゃなかってん。総連の学校、あんましらん学校やったし、だからそれが俺の朝鮮学校との初めての出会いやったね。そこまで違うんやと思った。やっぱり。しゃべれはるし。すごいなと思ったね。んでそこでしゃべったんがまあ、活動内容とか聞いて、参加しようと思いますって。」

留学同は同胞学生を網羅するための活動を、同胞学生たちが自ら訪ねてくるよう、徹底的に大学を中心に展開することを課業としてあげている。潜在的な運動団体の構成員(同胞

学生)がまさに大勢集まる場である、大学という場を拠点に留学同の活動が行われ、そしてその活動の中心を、大学内サークルに担わせ、サークルを正常に機能させることにより同胞学生の誰もが尋ねてきやすい気風を留学同活動に持たせたことが、金の留学同に関わり始める契機になったと言えるだろう。

「結局セミナーとか自主講座とか参加してへんかったわけ、スプセミ(スプリングセミナー。毎年度末に行われる全国の支部委員の合宿)も。んで決定的な変化が、三回なる前、スプセミ行かへんかってそのあとに、○○先輩から電話あって、サークルの会長してくれって。はっ？てなるやん。急すぎるやろ。支部委員にもなってへんし、そんな参加もしてないのに。はっ？て感じやん。(「会長」という）名前だけやって言って。ほんまやってくれって。むっちゃごり押ししてきてんけど俺むっちゃ断ってん。無理って。そうやん、今まで全然相手にしてくれへんかってさ、連絡もなくて。ほんでいきなり都合のいいように変わるなあと思って。反発したけど・・・・・・なったわ、会長。」
「そっからや。会長なって、ボックス（学内にあるサークル室）に○○先輩からやったら呼ばれるようになって。そっから○○先輩と仲良くなったわほんま。いい意味でな。ひたすらゲームして、んで俺にやたら相手するようになって。・・・そっからほんま本名について真剣な談話をされてん。名前変えろ、支部委員なれ。結構もめたけどな俺も。それでも名前変えたんは・・・談話受けてな、結構話したわ。納得できひんかってんけどな正味。ほんまだから押しが強かってん。納得はできひんかってんけど。俺がな、あの人が何で名前変えなあかんか言わはるけどな、それはわかります、わかりますけど、変えないと。・・・その繰り返しやってん。考えるけどやっぱりわからへん。でも、ごり押しされて、ああ、わかりました、変えますよ。そんな感じ。・・・まぁ、そのときはすぐには変えんかったけど、支部委員なって、活動していくうちに考えて（納得して)、ふんで、２、３ヶ月後には大学に届けたなぁ。」
「それからほとんどの行事、セミナーとか・・・・・・留学同の提供する教養の内容受け始めて、変わったね。・・・・・・自分で考えたことを後輩に（伝える)。その過程がよかった。俺の中で。・・・・・・ほんでやっぱ、ものすっごい考えとったと思う、毎日。なんで俺こんな行事の度、人呼んで、電話してこんなんしなあかんねんって。でもな、こうやって考えんのが在日なんやと。こういうふうに壁を越えていくのが在日なんやと思ってん。ほんで先輩とかに聞いて。何かしら整理していったわ。ほんでそん中で越えてったんはやっぱり名前やってん。俺は朝鮮人やと。何で俺が朝鮮人やって思ったかって言ったら、やっぱり南北の分断ってあるし、後は法的地位やな。・・・流れを考えたら朝鮮人なわけやん。自分のなかで納得するようになってた・・・そういう意識の変化って言うのはやっぱり留学同の教養、それを受けて先輩とかに話し聞いて、ほんで自分がそれについて考えたことを、伝えていく。後輩に。その過程でやっぱり留学同やらなあかん、がんばらなあかんって。」

ここで注目すべき留学同の運動方針が三点あげられる。まず、同胞学生に何らかの役職を与えることにより、盟員を増やし組織を拡大していくこと。次に教養活動を通すことにより「正しい」歴史認識と民族観を与えること。最後に「人との活動」を通じて、幅広い同胞学生達の心を掴むことである。

金の場合、「サークル会長」や「支部委員」という役職を与えられることで、以前より頻繁に、留学同が提供する教養の場に参加するようになった。そして、教養を通して自らが「在日朝鮮人」であるということの意味を積極的に見出し始めている。ただ、留学同が教養活動を通じて伝えようとしてくる「正しい歴史認識」や「民族観」は、それがそのまま彼の民族的アイデンティティを形成したのではなく、少なからず彼自身の考えと一致しない部分も存在していた。留学同ではそういう彼の考えは否定されるのではなく、先輩後輩との議論が行える環境、すなわち「人との活動」を通すことによって、彼の中で整理されていき、彼なりの留学同での活動意義が見出されていった。

３－２　「ダブル」として－洪泰俊（仮名）の場合

洪は中学生のころから、△△会（在日朝鮮人学生の集い）の活動に積極的に参加するようになる。それまで自分が在日朝鮮人であるということを当たり前と考えてきたが、初めて、ダブルであることを考えさせられるようになったという。

「ああ、ダブルであることに関しては、一人あの、先輩に言われたことは、お前も日本の血混じってるやろと、そういうのもっと考えなあかんのちゃうかって言われて、それからむっちゃ考えるようになりましたね。それまではずっと在日であることが当たり前やと考えてましたし。」

このときの△△会の雰囲気について、次のように語っている。

「それ（自分が日本人と朝鮮人のダブルであるということ）は、言えなかったですね。（内心何か）あったし、でも、隠さざるを得なかった状況にあったと思いますけど。△△会でも、普通に朝鮮人最高とか言ってるから、僕も中１の時には言ってましたけど、それを当たり前やと思ってたんですよね。あ、朝鮮人ってそういうもんなんやと思ってて。いくら自分に日本の血が入ってても、そういう風に意識するだけで、あ、朝鮮人になれるんやって思ってて。いいんやって。」

「朝鮮人最高」などという言葉は、被抑圧者である朝鮮人が朝鮮人を蔑む言葉への対抗として、在日朝鮮人運動の中で発せられる時には団結するうえで有効であったかもしれない。しかし、こういった状況では「ダブル」が「日本人性」を捨て、「朝鮮人」としてのアイデンティティを前面に押し出さなければ団体に参加できない。実際、Ｂは自分の「日本人性」については言い出すことが困難であった。民族圏を構築、拡大強化するためには、多様化するアイデンティティの現状を鑑みたとき、上のような言説は有効ではない。

その後、洪は大学に進学し、留学同に参加するようになる。留学同に参加し始めたころについて洪は次のように述べている。

「ああ、ここも一緒かと思いましたよ。(ダブルってどうなん？と聞かれて)・・・だってその、この人らほんまに考えてるのかなとほんまに思ってましたし。」
「ダブルを拒絶するような場でもあるんじゃないかと思います。固定概念だけで、動かされてた感じ？こういう風に活動するもんや、お前なんで考えへんのって。」
「ダブルってことを考えてはいたけど、日本籍の子もいたけど、自分から言うてる子ってほとんどいなかったし、やっぱ組織ってそういうもんなんかなって思ってて。答えが無い限り話しにくいっていうか。」
「でも僕がいきなり、言うたら、日本籍で、ダブルで、っていう人間がぽっと来たから、わからなかったんでしょうね。・・・・・・で、誰にも相談出来ずに。」

留学同に来ても「ダブル」という存在についての十分な考慮というものはなかったのではと洪は言う。彼にとっては、「ダブル」であるということについて相談できる、主張出来る環境ではなかったのである。さらに運動においても留学同は「固定概念で動かされ」るような、「『ダブル』を拒絶する場所」と彼は感じている。

前述したような「人との活動」を重視する留学同において、洪のような「ダブル」という存在が団体の活動に触れる中でもった葛藤を、他の団体構成員に相談できないという状況は無視することが出来ない。留学同の「教養」活動は、３－１に述べたように、「ダブル」でない朝鮮人にとっては、個々のアイデンティティに対して柔軟に対応しながら民族的アイデンティティを確立可能であった。しかし、「ダブル」に対しては有効に機能しているとはいえない。

ではなぜ「教養」は「ダブル」に対しては有効に機能しないのか。在日朝鮮人運動団体においては、在日朝鮮人が今なお継続する日本の植民地主義によって「奪われる者」、「抑圧される者」であることを強く認識することに主眼が置かれている。つまり、在日朝鮮人のアイデンティティ・ポリティクスは、＜被抑圧者⇒抑圧者＞という、一方向的なものである。拙論は決して＜被抑圧者⇒抑圧者＞のアイデンティティ・ポリティクスそのものを否定しているわけではない。在日朝鮮人が日本の植民地主義によって「奪われる者」、「抑圧される者」であることは厳然たる事実であり、このような発想は、植民地主義を克服するために当然必要なものであると言える。しかし、在日朝鮮人運動が所与のものとして放つ、「在日朝鮮人は日本の植民地主義における被害者である」という言説が、実は「ダブル」にとっては抑圧的に作用していることもまた、事実なのである。おそらくこの背景には、「抑圧者である日本人の血を引いている」という認識があるだろう。確かに「ダブル」は、「ダブル」であることに関わらず、在日朝鮮人として日本社会からの抑圧を受けている。しかし、そのことだけを持って、「ダブル」でない者と同様に「被抑圧者」としての対抗的アイデンティティを一貫して持てるかというと、そうではないのである。「国際結婚」が在日朝鮮人の婚姻の大半を占めている現在、「ダブル」の存在はもはや、在日朝鮮人社会においてマジョリティであると言える。よって、民族圏拡大を考える時、「ダブル」である人々との

係わりは最大の問題であると言える。在日朝鮮人運動は、より広範で強力な「政治」を行っていくためにも、在日朝鮮人のアイデンティティが多様化しているという事実を、具に把握する必要があるのではないか。

４．民族圏拡大に向けて

以上のように、インタビューを元に現在の留学同のアイデンティティ・ポリティクスの可能性、そして限界性を分析してきた。それをもとに民族圏拡大に向けた提言をおこなう。

・教養活動と「対話」

たとえ自ら同胞青年が訪ねてきたとしても、団体の民族的アイデンティティを求めた結果、青年らの「個」が抑圧されては、実質的な民族圏の拡大強化にはつながらない。民族的アイデンティティを求める教養活動とともに、それに参加する青年たちの様々な「個」のアイデンティティに対する柔軟なケアが必要と考える。その「ケア」の一つの形が「対話」ではないか。金の例では、教養活動に参加して生まれる葛藤とも言うべき彼自身の「考え」は、団体内の他の構成員との意見交換、対話によって整理され、金は留学同の民族的アイデンティティを自発的に形成することとなった。団体の教養活動によって提示される民族的アイデンティティと、同胞青年の「個」のアイデンティティの間に生まれる葛藤を、その青年本人に語らせ、またそれに対して語り返すことが、青年の「個」を抑圧することなく、ケアしながら葛藤を解決させる方法の一つではないかと考える。

ただし、洪の例にみられるように、「対話」がうまれるためには同胞青年にとって安心して、「個」のアイデンティティから生じる葛藤を語ることの出来る「他の構成員」がいなくてはならない。そのためには「他の構成員」があらゆる「個」に対して語り返せるような「民族観」を持ち合わせねばならないと思うのである。その「民族観」をもたらすものはまさに教養活動であり、その意味で教養活動と「対話」は相互補完的であり、あらゆる「個」を意識した教養活動(例えば、専ら「被害者側に立つ」朝鮮人を対象に想定するのではなく、「ダブル」の存在も意識した内容の教養活動)を求めていくことも忘れてはならないと考える。また、「個」が「他の構成員」に自分を曝け出して語れるためには「他の構成員」があらゆる「個」のアイデンティティの存在を常に意識していることが望ましい。そこで、上でみたインタビューのような「個」が語る「自分」というものを資料化し、多くの構成員がそれを共有できるようにする活動をしてみてはどうだろうか。

参考文献　アイデンティティ・ポリティクスをこえて　金泰泳
民が代斉唱　鄭暎恵
在日朝鮮人・韓国人　福岡安則

在日本朝鮮人総連合会 21 全大会報告文
「文化的アイデンティティとディアスポラ」　スチュアート・ホール　小笠原博毅訳、『現代思想』
在日韓国人青年の生活と意識　金明秀・福岡安則